会報 第37号

2004. 3. 31

戦没船を記録する会

〒105-0014 東京都港区芝2-8-13 睦マンション２０６
Tel:03-3452-5085 FAX:03-3452-2711 郵便振替 001606-7-19515

目　　次

第１１年度を迎えて ・・・・・・・・・・・・・・1
第１１年度活動方針（案）・予算（案）
　第１０年度活動報告 ・・・・・・・・・2－3
１０年史編集委員会 ・・・・・・・・・・・・・3
気仙沼展示パネル（２）・・・・・・・・・・・ 4
徴用漁船の証言・記録集・・・・・・・・・・・ 5
気仙沼展に感動・ＤＵ－劣化ウラン弾・・・・・ 6
第１０年度収支報告 ・・・・・・・・・・・・・6

第11年度を迎えて

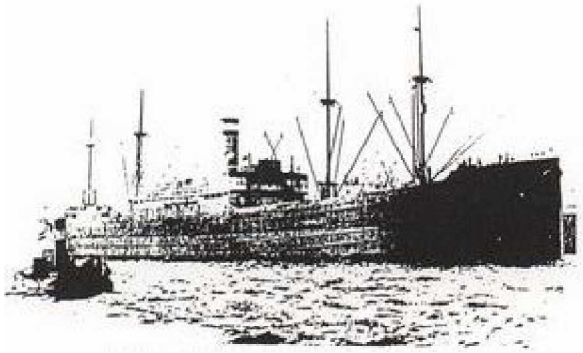
会　長　　川島　裕

１９９４年、「繰り返すまじ戦没船の悲劇」を合言葉に、海の平和を愛する船員ＯＢや戦没船員遺族有志が集まつて、『戦没船を記録する会』を発足させてから、早くも第１１年度を迎えた。

現在、『１０年史』の編纂中であるが、１０年を振り返つて、あらためて会の活動の中心になって献身的に働いてくれた役員諸氏、そして、これを強力に支えて下さつたすべての会員の皆さんに対する感謝の思いを新たにしている。

１０年の歩みは決して平坦なものではなかった。戦後年を経て、戦没船の写真も関係資料も散逸して、これらを収集するのにも苦労があった。必ずしもすべての人の賛同と協力があったわけではなく、一部には冷ややかな目もあった。そんな中で、乏い財政事情にもかかわらず、みんな奉仕の精神でよく頑張った。

おかげで完成した戦没船のアルフォト写真を用いて、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地で戦没船のパネルを開催し、また各地で開催される平和のための戦争展に協力出展するなど、積極的な活動を展開することが出来た。



新たに収集した戦没船の写真
帝祥丸　7.973総ﾄﾝ　拿捕船　（ドイツ船籍）

そして、２０００年８月１５日の終戦記念日には、全日本海員組合の絶大な協力によって、関西地方支部会館に、船没船と海員の資料館・『海に墓標を』を開館することができたことは、この上ない喜びであった。

昨年は、気仙沼で漁船を中心としたパネル展を開催して、好評を博したことは記憶に新しいが、第１１年度は、東京海洋大学とビキニ水爆実験五十周年を迎えた焼津での開催を計画している。

また、今年も従来通り各地の『平和のための戦争展』にも積極的に協力参加する予定である。

第１１年度も皆さんのあたたかいご協力をお願いします。

『日本海軍特設艦船正史』　発売

本会会員で船舶史研究家の正岡勝直氏が、長年の研究の成果をまとめた『正史』が完成、発売となった。定価３０００円。ご注文は本会まで。

第１１回定期総会告示

戦没船を記録する会　会長　川島　裕

会則の定めに従い、下記により第１１回定期総会を開催いたします。

奮ってご参加ください。

記

日　時　２００４年４月２４日(土)１４時より
場　所　東京浜松町海員会館　第２会議室
　　（港区海岸１-４-９　ＪＲ浜松町駅下車）
議　題　報告事項
　　第１０年度活動報告・決算報告
　　第１１年度活動方針・予算
　　その他

第１１年度活動方針(案)

米・英のイラクへの先制攻撃による戦争開始から１年を経過したが、戦争の大義とした大量破壊兵器は発見されず、イラクに平和が訪れるどころか、占領軍への抵抗やテロ攻撃がますます激しくなり、泥招化の懸念が深刻になっている。また、この戦争に反対する動きは全世界に広がっているが、一方でサウジアラビアやトルコなどでの爆破テロに続いて、マドリードで複数の列車が爆破されるテロが発生し、その直後の総選挙でイラクへの派兵撤退を主張する野党が勝利するなど、武力で平和は実現できないとする風潮は、世界的な流れとなっている。

アメリカの戦争にいち早く賛成し、無批判に追随してきた小泉政権は、イラクに重武装の自衛隊を派遣しただけでなく、有事法制関連法案等によって、アメリカの戦争に国民を総動員する体制を作ろうとしており、世界の平和と人類の安定を願う世論に背を向けて、アジアでも孤立を深めている。

こうした状況は、平和と海上の安全にも大きな重圧となっており、われわれは、再び戦没船を生じさせないという決意を新たに、多くの人たちと協力して積極的な活動に取り組まなければならない。そのため、次のような活動に取り組む。

１、前年から取り組んできた本会の「１０年史」を完成させる。
２、本会の作成した戦没船の写真や、関連資料をデータベース化して、インターネットなどを通じて、公開するための準備を引き続き進める。
３、戦没船アルフォト写真の整理、点検、破損品の新換え。関連資料を整理、展示会用に項目別、年度などに仕分けし、利用し易くする。
　また、漁船・機帆船関係の資料収集にも積極的に努力する。
４、各地のパネル展に協力すると共に、本会独自のパネル展開催を企画し、実現に努める。
５、戦没した船と海員の資料館の維持発展のために、海員組合と協力し引き続き努力する。
６、海上労働ネットワークをはじめ、関係友誼団体の活動に協力する。
７、その他

予算案

会費納入の呼び掛けが、会報発行と連動しているため、会費収入もその影響を受けて不規則になりがちで、そのため予算案も前例を踏襲する形を取ってきたが、今年度もそれを踏襲することとする。

ただし、パネル展の経費について、各地での共催展は、その地区の在住者が手弁当で取り組んでいるため、参加費と展示品の搬送費程度で済ませて来た。

しかし、「漁船の太平洋戦争・気仙沼展」のように、遠隔地で長期に本会の独自展を開催する場合、担当者の負担は相当なものになる。そのため、旅費交通費・宿泊費について一定の基準を定め、個人負担を軽減するための措置を講ずる。具体的には理事会で決定することとする。

第１０年度活動報告

１、組織の状況

昨年４月、本会理事の山中正吾さん、今年３月同田中正八郎さんが逝去された。会員の高齢化が進み、運動の面でも財政面でも、現状を維持するのに相当の努力が必要である。

今年３月末の会員数は正会員は７１名、賛助会員は３９名である。

また、この１年間の会費収入は正会員５０名、賛助会員３０名で、寄付金・雑収入と合わせて約５０万円であった。支出の合計は６２万円余で、気仙沼展の資料整備などの費用で、例年より若干増加した。

財政の詳細は別項の「収支報告書」を参照。

２、事業の内容

戦没船の写真収集は、溝邊修関西支部長が「拿捕船」の写真収集に取り組み、オランダ６隻、イギリス２雙、ドイツ１雙と日本船１隻の写真収集に成功した。戦没船や戦没船員に関する新資料の発掘は、極めて困難になっているが引き続き努力している。

今まであまり力をいれていなかった漁船や機帆船の資料収集について、「漁船の太平洋戦争」気仙沼展を機に、精力的に努力した結果、それなりの成果を得る事が出来た。今後この分野での努力を続けることにしている。

米・英のイラク戦争開始以来、日本では米国の戦争に協力するための、有事法制制定に向けた動きが活発になり、有事法制反対やイラク戦争反対などの集会や行動が広がり、本会としてもこれらの運動に、会員有志が積極的に参加している。

３、各地のパネル展

「漁船の太平洋戦争・気仙沼展」

第１０年度活動方針に基づいて、今年度は本会独自のパネル展「漁船の太平洋戦争」気仙沼展を開催した。期日は気仙沼市海の殉難者慰霊法要の日に合わせて、９月２４日から５日間開催した。主催は本

会と気仙沼地区海友会、後援には気仙沼市、唐桑町、全日本海員組合や地元の漁船関係の団体、地元メディアなどが名を連ね、会場の設営などには地元海友会の船員ＯＢが多数協力してくれた。

この展示会は、本会の展示会では始めて、漁船を中心にした内容で構成し、徴用漁船の概要、気仙沼・唐桑の徴用漁船一覧表、特設監視艇隊の任務、監視艇隊の配属表、徴用漁船関係年表その他関連の展示パネルなど多数が展示された。気仙沼・唐桑の徴用漁船は、船主も乗組員もみな地元の人たちで、徴用漁船一覧表の前では、元乗組員や家族・遺族、船主関係者が大勢集まって、この船は誰それが乗つていてどうなったとか、この船主は今どうしているとか、一日中賑わっていた。

漁船関係のほかには戦没船アルフォト写真５００枚、都道府県別と宮城県戦没船員数表、トラック島の戦没船、ガダルカナル島の戦跡、軍艦に改装された商船、その他が展示された。会場には気仙沼市長も参観に訪れるなど大成功であつた。

平和のための戦争展・よこはま

『２００３平和のための戦争展 IN よこはま
みつめよう、語り合おう、戦争の過去といま』をテーマに、８月８日から１０日の３日間、横浜駅西口の「かながわサポートセンター」で開催された。本会は９５年以来毎回参加しているが、最終日の午後に川島会長が戦争体験を話るトーク番組に出席した。

今年はアメリカのイラク攻撃による劣化ウラン弾やクラスター爆弾による子供を始め、イラク市民の被害の残酷さが告発された。今年の人場者は約３０００人であった。

平和のための埼玉の戦争展

「２００３平和のための埼玉の戦争展」は、７月２４日から２８日までの５日間、浦和駅前の「コルソ」７階の展示場で開催された。今年のテーマは「戦争は答えではない」。戦役船を記録する会は「漁船の太平洋載争」を中心に、戦投船アルフォト写真、「戦時徴用船の最後」その他を展示した。

その他、静岡市、焼津市などの「平和のための戦争展」にも一部参加した。

４、会報の発行

戦没船を記録する会の会報は、第３５号（０３年９月２０日)、第３６号（０３年１２月１日)、第３７号（０４年３月３１日）の３回発行した。年４回発行の方針を実現する努力が必要。

１０年史編集委員会

「１０年史」編集は、第１０回定期総会の決定に基づいて、進められた。現在、予定した原稿がほぼ出揃い、最終的なチェックを経て印刷にまわされることになる。編集委員会の経過は次の通り。

【第１回編集委員会】（０３年７月１日)

川島会長、中島・川村副会長、理事、監事など１２名出席。１０年史刊行のための組織系体は、理事会→編集委員会→事務局とする。編集委員会の委員長を川村副会長、委員を川島、中島、伊東、河内山、二宮、正岡の各氏、専門委員を中島、伊東、河内山及び事務局(豊田、桑島、栗原、篠原)と決定。

年表、第１０回総会の議事録を参考資料に、どのような１０年史にするかを議論した。

【第２回編集委負会】（０３年９月４日）

委員１０人が出席。１０年史の目的は、主にこの会の運動の記録を残すこととし、創立以前からの動きと創立後１０年間の活動の記録を、社会的な背景を考慮して記録する。各年各地のパネル展、戦時海運研究会、資料館の開設、会員からの投稿等、その他主な活動、年表等の資料を収録することとした。

【第３回編集委員会】（０３年１０月９日)

委員９人が出席。前回の議事録と修正した年表を配布。運動の記録を残すことを目標に、どのような内容にするか論議。骨子として、創立までの動き、１０年間の活動、パネル展(会の独自展と各地の共催展)、戦時海運研究会、戦没した船と海員の資料館創設、資料編、年表、会員からの投稿・記録などを載せることにした。

【第４回編集委負会】（０３年１２月１２日)

出席者１４人、委員以外の会員も参加。前回までの委員会の報告を参考に、どういう章立てにするか誰が執筆するかを決めた。１０年間の活動については創立以後の前記と、資料館創設、それ以後の活動に分けて分担することとした。

原稿締切りを０４年１月末とし、集まった原稿をパソコンに人力、２月２０日に原稿の合評会を開くこととした。川村委員長が職務上の都合で退任、中島副会長が後任の編集委負長に指名された。

【第５回編集委員会】（０４年２月２０日)

委員１１名が出席。出来上がった原稿について報告し、未完成分の早期提出と、これらの他に１０年史に掲載すべき内容の検討を行った。編集・出版に関する今後の取り組みについては、３月２５日開催の理事会で論議することとした。

気仙沼展展示パネル（２）

徴用漁船の概要

Ⅰ．太平洋戦争以前

日本の陸海軍による漁船の徴用は、日中戦争開始の1937（昭和12）年に始まり、日中戦争全体を通じては２千隻以上に及んだようであるが、その徴用・解用・喪失その他の実態は明らかとなっていない。

Ⅱ．太平洋戦争時

太平洋戦争における海軍による漁船の徴用は、約２千隻、その内特設艦船７００隻(内特設監視艇４００隻、その他３００雙)、一般徴用漁船１３００雙と見られる。

大多数である一般徴用船についての記録が殆ど残されていないので、記録の残されている監視艇の分析により全体の傾向を類推する。

１、徴用･喪失

(別掲パネル「特設監視艇の徴用と喪失」参照)

監視艇(９５％が漁船)への漁船の徴用は、日本を取り巻く緊張が高まる中で、４１年７月より本格化し、同年末には２１６雙に達し(４１年８月現在の５０総トン以上の発動機付登録漁船は８３９隻とされていたので、実にその２６％が漁業を止め軍に徴用されたことになる)､開戦への準備が急ピッチで進められたことが窺える。

４２年７月までには３１１隻の徴用がなされ、喪失が少ないこともあつて、監視艇の在籍数は２９２隻と戦時中の最多となったが、その後の徴用が小休止となる一方、戦闘による喪失が散発的に発生し漸減傾向にあった。

４４年１月には米軍のマーシャル諸島への攻撃が始まり、駐屯する日本軍の壊滅と共に、配備されていた監視艇も５０隻以上が沈没又は運航不能の壊滅状態となった。

監視艇隊強化と米軍の進撃・日本本土への爆撃に備えるため、４４年４月２０隻、８～１２月にかけて６３隻の徴用がされたが、洋上哨戒区域での沈没被害を中心に喪失が激増し、４４年中には１００隻を失い、４５年には７５隻以上の喪失となつた。従つて、全期間を通じて４００隻が徴用され、２１７隻が沈没または破棄され、喪失率は５５％弱と高率となった。

終戦時に残存した監視艇は、１７０隻を割っていたと見られる。

２、配属（別掲パネル「特設監視艇配属表」参照）

徴用された監視艇は、軍の必要に応じて配属され、時期により大きく変動しているが、海軍部隊のあるところ、殆ど監視艇が配属されたといえる。

主たる任務が哨戒・監視であることから、洋上哨戒を主とする特設監視艇隊(以下監視艇隊)に重きが置かれ、同艇隊新設の当初(４２年２月)より監視艇全体の約３０％に当たる８０雙弱が配属され、順次増加しピーク時の４４年１２月には１６４隻に達し、全監視艇の７０％近くを占めるに至っている。また、監視艇隊に編入された総数は３１１隻(全体の３/４）に達している。しかし、本土防衛に追い込まれた４５年５月、監視艇隊は解散し、本土内の各鎮守府・警備府に分散配属となった。

次に、日本の委任信託統治とされていた、内南洋諸島を主とする前線基地にある防備隊(外戦部隊)に１００隻前後が配属されたが、４４年１月以降米軍の攻撃で順次壊滅状態に追い込まれた。

日本本土の鎮守府・警備府に全体で８０～１００隻位が配属されたが、最終的には外戦部隊や監視艇隊の消滅により内戦部隊の各鎮守府・警備府への配属が殆どとなった。

３、一般徴用船

一般徴用船は、農林省・地方公共機関・漁業団体・現地軍等を通じた様々なものであり、記録が残されていないものも多く、必ずしもその全容・実態は明らかではない。

開戦の年の４１年から本格化し、４３・４４年と激増しているが、中には１０トン足らずの漁船も含まれており、正に総動員との様子が窺える。

喪失については一般徴用船が物資の輸送に多く投入されていたことから、商船の喪失同様あるいは少し遅れて４４年以降に激増したとみられる。そのことは、徴用が４４年に急増したことからも窺える。

喪失数は戦後日本の経済安定本部発表による1595雙との数字がある。非徴用船を含めて戦争により失われた漁船と見られるが、大変な数である。

４、戦没漁船員数

戦没漁船員数は、必ずしも明確となっていないが、戦没船での戦死のみでなく、沈没は免れたが交戦により戦死没した御霊、操業中等の非戦闘行動中に攻撃されてな＜なつた御霊等も多くあると思われ、その総数は相当数にのぼるものと見られる。

徴用は急なものも少なくなく、家族との面会談もないまま任地に赴き、過酷な条件の下で任務に励み、交戦ともなれば逃げる所やすべもなく、爆雷を抱えて敵艦に突つ込んでゆき､(正に「海上特攻隊」のように)玉砕した船・御霊も多くあるようだが、玉砕には証言・記録もなく、その実態は明らかとなっていない。

玉砕ケースのみではなく、実態が明らかになっていないケースが少なくない。

証言・記録集

◎早坂千代夫(元監視艇乗組員)の回想

「ワレ空母ヲ含ム敵機動部隊ヲ発見」が「接触」となり間もなく「軍艦旗ヲ焼却、暗号書ヲ投棄セリ。全員C地(死の暗号)ニツク」、続いて「ワレ艦砲射撃ヲ受ク」「敵艦載機ノ攻撃ヲウケ沈没ニ頻ス‥」「ワレー丸トナッテ敵駆逐艦ニ突入セントス」など、壮絶な電文を残して多数の艇が消え散った。

暗号が次第に平文になり、哨戒線上の私の船に入電してくるたぴに暗然たる思いにかられた。

◎網地丸＝５回交戦、戦死３０人以上？

鋼製漁船、107総トン、S4.2月建造、宮城県網地島籍、最大航速9ノット。

S18.3.4日＝海軍に徴用され、第22戦隊第３監視艇隊に配属。兵装＝短５糎砲1、7.7粍機銃１、小銃５。

S19.8.6日＝僚艇25隻と共に横浜出、10日哨戒区着。

13日0810＝左35度4000m(33-17N152-04E)に浮上中の敵大型潜水艦発見、直ちに突撃開始。

0815＝距離3000mにて砲銃撃開始、敵艦潜水。

1010＝右120mに敵艦浮上、距離1000～4000m間で砲銃撃・爆雷投下の激戦。

1025＝初被弾。　1035＝暗号書海中投棄。

1050＝機密書類全部処分、体当たり敢行するが回避される。　1200＝機銃破損。

1220＝短５糎砲撃ち尽くし、全員自決準備の上小銃５丁で突撃続行。

1240＝敵砲銃撃停止し遁走。　戦死６人、重傷７人、軽傷４人、船体は１０数発被弾し中破、マスト倒壊、無線機破損。

我消耗弾＝短５糎弾５０発、7.7粍銃弾1800発、爆雷４発、小銃弾300発、小銃榴弾５発、発煙筒３個。

敵消耗弾(推定)＝12糎・８糎砲弾300発以上、20粍・7.7粍銃弾5000発以上、魚雷２、機雷１と見られる。

14日1042＝丹艦(第1雲洋丸)に戦死者収容。

1252＝第5笹山丸と共に帰途につく。

1705＝網地丸戦死者告別式、水葬実施。

8.17日＝網地丸横浜帰着。

S20.1.5日＝敵機と交戦、被害・戦果なし。

S20.3.24日＝敵機(B-17)と交戦、被害・戦果なし。

S20.4.19日＝横浜港出撃、南哨戒区に向かう。

22日1233＝31-04N138-35Eに於いて敵哨戒機(PB4Y-2)２機を発見。

1236＝敵機２機と交戦。　1248＝敵機撃退。

(以下網地丸についての「ほ号高丸」報)

1555＝距離9000m(30-50N138-30E)に敵浮上潜水艦発見、直ちに突撃開始。

1601＝敵潜と交戦中。

1627＝挟叉弾を受け中央部に白煙を吹上、後部爆雷の誘爆により大爆発を起こし、20m程度の黒煙を揚げ、艇首を直立、瞬時に沈没(31-35N138-45E)。

乗員全員戦死。

◎第８太洋丸＝２回交戦、３人戦死

乗組員３０名(全員船員)、木造鰹鮪漁船、128総トン、S18.6月建造、船籍港焼津、通常航海速力8.5ノット、燃料タンク37トン、清水搭載9トン、食糧搭載2カ月分、無線通信機500W中・短波両用(予備電池無し)。

武装7.7粍機銃１丁・小銃３丁。

S18.7.21日＝農林省徴用、農林特殊漁船団に所属。

S19.2.10日＝横須賀鎮守府指揮下の「特殊漁船」となる。９月入渠武装工事＝５糎砲1、25粍銃２、13粍銃２、電波探信機等を装備。

9.28日＝三崎港出港。

29日1115＝31-00N146-40Eにて、距離200mに敵潜水艦発見。

1117＝交戦開始、船橋・無線室と空中線に被弾、船長・機銃員戦死、通信士・操舵員重傷、操舵装置大破、電信機完全破損(操舵・無線機共に不能)。

1120＝機関室に被弾、操機手戦死、機関長外１人が負傷、燃料タンク破損、燃料油送管折損(主機停止)。船内浸水、左舷に１０度傾斜、漂流状態となる。

1130＝敵潜は次第に射撃を軽減、南東方約600m付近潜没。　戦死３名・重傷４名・軽傷３名。

30日0800＝戦死傷者の処置、機関・操舵装置等の応急修理を終え、4.5ノットで帰投開始。

10.1日1700頃＝下田港に帰着。直ちに数人が上陸、下田警察署に事情説明、横須賀鎮守府に戦況報告。下田海軍病院(分室)長以下数名が来船、戦死者確認、負傷者を病院に収容。

10.2日＝遺族へ非公式対面連絡、戦況の聴取と今後の行動指示あり。

2日夜＝遺族・船員一同で通夜。

S19.5.17日明方＝(再度就役)指定漁区到着。

21日早朝＝31-20N154-40E付近にて、突如敵機の攻撃を受ける。船内・機関室浸水、機関停止、漂流。

7.7日＝50日間の漂流の後、31-57N149-18Eにて水雷艇「千鳥」に救助されたが、船体を放棄。

(以下次号に続く)

註　好評であった「漁船の太平洋戦争・気仙沼展」の展示パネルを掲載することとしましたが、展示後新たな資料等が出てきており、また、展示パネルより多くの文字数も記載できることから、展示パネルの内容を部分的に多少変えたものとなりました。
項目・趣旨は変っておりませんのでご了承願います。

気仙沼展に感動

前略、この度の太平洋戦争峙に多くの鰹鮪船が海軍徴用船として各戦域で活躍中、戦没戦死された多くの船員の方々は私の郷里唐桑町の実家の近くに沢山居られます。特に送って頂いた会報の文中にある相模丸の小山清治郎さんはすぐ前の家で、私どもの大先輩です。子供の頃にかすかに記憶が有ります。

資料を提供された小山恵美子さんは妹さんに当たりますが、今も時々お会いし、懐かしく昔話をしております。他に関東沖で沈んだ宝昇丸の船長さん、機関長さんは私の家のすぐ後の方です。

昭和１９年頃、私が小学校６年生の時、唐桑鮪立港に寄港した鮪立船主の鰹船が、何隻か兵装武装した雄姿が今も鮮やかに目に焼き付いており、北方警備に船団で出港して行き、海軍の軍人も乗っていたので、米英に負けるとは子供心にも思っても居りませんでした。

昭和２０年敗戦となり、何隻かは無事帰還し、昭和２１年より鰹漁に活躍し戦後の食料難に貢献しました。私も今の中２に行かず、鰹船の飯炊きで、家計の足しに父と共に(父は海軍の徴用で生還)乗船し、船乗り一生の家業として、目下気仙沼海友会の一員で頑張って居ります。

海の市での展示会には、私ごとの法事で参加出来ませんでしたが、会期中缶ジュースを持参し陣中見舞を兼ねて２・３回程見学させて頂き本当に感動しました。有難うございました。　　敬具

気仙沼市字岩月箒沢　玉川政俊

ＤＵ－劣化ウラン弾

ＤＵに関する参院福島瑞穂議員の質問と小泉総理の答弁より　(03.8.29)

(質問) 劣化ウランは人体に有害な影響を与える、アルファ放射能である。一般住民に無差別に被害を与えることは、国際法上からも許されない。

(答弁) 1996.8.29、国際人権委の下の小委員会が、劣化ウラン等を含む兵器等、大量破壊や無差別に影響を与える兵器の製造と拡散を制限するよう、各国に求めること等を内容とする決議を採択。
2003.2.13、欧州議会が欧州遵合加盟国に対し、劣化ウラン弾の使用の一時停止を求める決議を採択したことを承知している。

しかし政府としては劣化ウラン弾の影響について国際的に確定的な結論が出されているのは承知しておらず、国際機関等による調査の動向を引き続き注視していく考えである。

英国防省　　ＤＵの健康障害危険性を認む

現在、イラク駐留中の英軍兵士に対し、下記の内容の劣化ウラン情報カードが発行されている。

あなたは劣化ウラン(ＤＵ)が使用された戦場に派遣されています。　(ＤＵ)は、低度ながら、放射性の重金属であり、健康障害を引き起こす可能性があります。あなたは任務中にＤＵ(劣化ウラン)を含んだ塵にさらされるかも知れません。　　(ＤＵ情報カード Med1018)

対人地雷は国際的な市民運動により禁止され、核兵器についても放射能をバラ撒く大気圏核実験は既に禁止(1968年)された。劣化ウラン兵器の廃絶も広く訴えられている。「劣化」ウランの名称は誤つた印象を与えるが、その使用によって多くの人を殺傷するだけでなく、戦場に残った放射能によって、ガンや白血病が、子ども達を含む多くの人々を苦しめている。　　(と)

【後記】　３月２５日に東京浜松町海員会館で理事会を開催し、第１１回定時総会に提案する、次年度活動方針案や予算案、活動報告案を審議決定しました。

また、「１０年史」刊行について作業の進捗状況を報告し、今後、専門委員会を主体に編集、出版に当たることが確認されました。今後とも会員の皆さんに、活動面でのご意見や、会費納入で財政強化への一層のご協力をお願いいたします。　　(篠原)

第１０年度収支報告書

基本会計　　(2003年4月～2004年3月)　円

科　目	入会金	繰越残高
前年度繰越入会金	150,000	
合　計	150,000	150,000

一般会計

科　目	収　入	支　出
前年度繰越	527,226	
会　費	300,000	
賛助会費	119,000	
寄付金	41,500	
事業収入	31,200	
雑収入	15,222	
通信費		89,000
会議費		17,250
印刷費		89,885
事業費		82,537
交通費		2,300
事務所費		240,000
雑　費		100,942
繰越金		412,234
合　計	1,034,148	1,034,148

繰越金内訳

科　目	基本会計	一般会計
現　金		8,513
振替貯金		247,305
銀行預金	150,000	30,114
同		126,302
合　計	150,000	412,234